

書評 遠藤潤『平田国学と近世社会』

二〇〇一年から国立歴史民俗博物館（樋口雄彦・宮地正人ら）が中心となって、それまで未公開であった平田篤胤・鋈胤・延胤三代を中心とする平田家資料の整理が進められ、二〇〇四年にはひとまず完結し公開されるに至った。その結果、たとえばこれまでは全てが知られていなかった『気吹屋日記』の文化十三年（一八一六）～明治四年（一八七一）までの存在が明らかとなり、公開・翻刻されるに至った（『国立歴史民俗博物館研究報告』）。また、書状などから篤胤らの交流ネットワークが一段と鮮明になり、篤胤が収集した古物などからはその学問の性格を克明に理解できるようになった。本書は、この平田家資料の調査にも携わった気鋭の研究者による、平田家資料も駆使しての最新の平田国学像提示の試みである。

もっとも、戦時中の国粹主義的な平田国学像を別とすれば、平田家資料の全面的公開がなされなかった段階でも、村岡典嗣、伊東多三郎、渡辺金造、芳賀登、岸野俊彦らによって、平田国学の奥深い体系は一定程度明らかにされてはいた（幽冥界・仙界への関心、博物学的関心、対外情報の意欲的収集、幅広い門人ネットワークと出版活動、諸学にまたがる文献研究など）。本書は、こうした戦前来の研究において部分的に指摘されてきたことが、平田家資料によって改めてより精度の高い史料によって確認されたことも示しており、末尾に収録されたほぼ完璧な研究文献目録とともに研究史を現段階で振り返る上でも格好の書物となっている。

無論、現下の人文学の動向に明るい著者独自の視点も見逃せない。たとえば、著者は記紀の「読み方」という問題に着目する（第一部「平田国学の編成と諸思想」）。篤胤は、「神代生成の史実を示すことば」として読んだのだが、まさにこの「読み方」の歴史的位相こそが重要だと著者は指摘する。ヨーロッパ経験科学の伝来という段階での、記紀の「読み方」をめぐる歴史的変容こそが、篤胤やその他の国学者の論争の基底にも働いているというのが、著者の眼目である。あるいは、従来は牽強付会として否定的にしか評価されてこなかった篤胤の諸思想に対する臨み方には、「異なるコンテストでの表象のあいだに関係を開くことでもあった」という指摘も重要だ。ここには、本居宣長との比較など、日本の閉じた場のみに着目してきた従来の研究とは異なる、広くは世界史的な十九世紀の場に平田国学を置こうという著者の斬新な視点がかいま見える。

第二部「平田国学の宗教社会史」は、平田国学と近世神祇道支配に当たっていた吉田家・白川家の関係を実証的に明らかにしたもので、平田家資料が随所に駆使された論考である。吉田家に関しては、篤胤がその学師となった経緯、また門人の中核であった神職らが気吹屋と吉田家双方に関係することを求めた背景、吉田家側が気吹屋に拠って神職組織化を進めた事情、さらに両者の齟齬と確執などが克明に跡づけられている。白川家との関係に関しては、両者の間にあった古川躬行に焦点をあてつつ、白川家を基軸とした神祇官復古構想の形成と挫折に気吹屋がどのように関わったのかが明らかにされている。これらの論考では、平田国学を宗教組織として取り扱い、教義・儀礼・組織という視点から、とくに後

二者をクローズアップしている点が新鮮な点だ。ただし、既成神職組織と平田国学という難度の高い問題に迫った点は大いに評価できるとしても、はたして気吹屋を、この時期の他の新興宗教組織と同様の組織として扱えるのか、ここは議論の余地があるところだろう。補論として収録されている気吹屋の出版・流通活動についても、『古史伝』に集約される近代以降のわれわれの平田国学のイメージとは異なる像を暗示していて大変興味深いところだったが、著者のいう「読書の宗教史」とは何なのか、ここももう少し補足がほしいところである。

平田家資料の公開が、これまでの篤胤の著書の刊行年代の修正、他の国学者との確執や対立の事情を明らかにしたという水準を超えて、従来の平田国学像を根本的に革新するに至るのか、本書はその課題に挑んだ最初の著作といえるだろう。

(桂島宣弘 立命館大学文学部教授)